

『あしたのジョー』における日韓パワーゲーム

—矢吹丈と金竜飛の対戦—

林 相 珉*

(e-mail: y3k76@hanmail.net)

目 次

1. はじめに
 2. 対決！！二つの「胃ぶくろ」
 3. 「戦うコンピューター」・金竜飛の二重性
 4. 「父親殺し」の対戦
 5. 改訂版「大東亜共栄圏」
 6. まとめ
-

1. はじめに

「まっ白に……燃えつきる」というセリフで有名な『あしたのジョー』は、2008年に連載40周年を迎え(連載誌の「週刊少年マガジン」は創刊50周年)、コーヒーのジョージア、お菓子のグリコ、コンビニのファミリーマートなどの会社では『あしたのジョー』のイラストを商品や企画に取り入れながら、当時の読者をターゲットにイメージ戦略を展開している。ファミリーマートは企画の趣旨について、「このたび、ファミリーマートでは、連載四〇周年を迎える同作品とタイアップをすることにより、当時の読者世代をメインターゲットに、ドリンク剤などの対象商品の引換券、またはオリジナル目覚まし時計が当たるキャンペーンを実施いたします。また、当時の読者世代は、現在のコンビニエンスストアのドリンク剤の主要購買層であることから、30代から50代のサラリーマンのお客さまの獲得を図ってまいります」¹⁾と書いて

* 韓南大学校、非常勤講師。日本文学／在日文学・文化研究

1) ファミリーマート「『あしたのジョー』タイアップ企画」(http://www.family.co.jp/company/news_releases/2008/081128_1.html)

あるように、同企画は「当時の読者世代」(団塊世代=全共闘世代)を「ドリンク剤の主要購買層」と想定することから生まれるであろう相乗効果を見積もったイメージ戦略をとっている。「ドリンク剤」とは、主に「リポビタミンD」「ユンケル」「ウコンの力」などに代表される栄養ドリンク剤のことであり、これらはバリバリ働くサラリーマンという文脈で消費される商品である。これらの商品と『あしたのジョー』がタイアップされる時、そこに前景化するの、仕事にへこたれず、仕事に「まっ白に……燃えつきる」矢吹丈のイメージに他ならない。しかし、このようなイメージが普遍化すればするほど、矢吹丈とともに「青白く燃えあがった」金竜飛が、何故、負けたかを考えることはできなくなる。本稿では、二人の勝敗を同時代の第2次朝鮮戦争の危機説と日韓経済の接近という文脈から読み解いてみることを目的とする2)。

2. 対決！！二つの「胃ぶくろ」

TVアニメ『あしたのジョー2』が『挑戦者ハリケーン』というタイトルで韓国のMBCに放映されたのは、1993年9月26日からである。ところが、MBCは全47話の半分も放映されない第17話を最後に、何のコメントもなく突然放映を打ち切ってしまうことになる(第18話の予告を放映しているにもかかわらず)。ソン・ラクヒョンはその理由について次のように書いている。

その時！ことは起きたのである。まさかと思っていたワールドカップサッカーアジア最終予選

2) テキスト及び関連年譜

1968年1月1日	『あしたのジョー』連載開始(「週刊少年マガジン」)
1968年1月21日	北朝鮮武装ゲリラによる青瓦台襲撃未遂事件発生(金新朝事件)
1968年1月23日	アメリカの情報収集艦であるプエブロが北朝鮮に拿捕された事件発生(プエブロ号事件)。立て続けに起った二つの出来事により、朝鮮半島には緊張が高まり、当時の日本のメディアは第2次朝鮮戦争の危機と報じ始める。
1968年8月29日	第2回日韓定期閣僚会議(第1回日韓定期閣僚会議は1967年8月11日)
1969年1月20日	リチャード・ニクソン大統領就任(同年7月25日にベトナム戦争の縮小と早期終結を旨とする「ニクソン・ドクトリン」発表。そして、翌年7月には在韓米軍削減を発表)
1969年2月12日	日韓協力委員会発足
1969年4月15日	北朝鮮による米偵察機撃墜事件発生
1970年4月20日	日韓協力委員会第2回総会
1973年3月29日	アメリカ軍がベトナムから撤兵完了
1973年5月13日	『あしたのジョー』連載終了
1993年5月28日	TVアニメ『挑戦者ハリケーン』(~1993年9月26日、第17話を最後に途中放映中止、MBC)

で韓国が日本に試合のスコアだけでなく、内容面でも完敗したのである。(中略)勿論、結果的には奇跡的にイラクの助け(?)で韓国は本選進出し日本は脱落する結果となったが、少なくとも韓国が日本に敗れたその日に、もしも「あしたのジョー」の第18話が放映される場面を想像していただきたい。日本人のボクサーが韓国人ボクサーの顔面ににわか雨の如くパンチを浴びせる場面を…そして日本人ボクサーにダウンされる韓国人ボクサーである³⁾。

韓国で放映された『挑戦者ハリケーン』では、主人公の矢吹丈は日本人ではなく韓国인으로設定されている。そして、第18話から登場するはずだった東洋バンタム級チャンピオン・金竜飛は、第3国人の「ペドロ」という名前になっている(因みに1998年9月にソウル文化社から出版された『ハリケーンジョー』では、金竜飛選手はタイ人(キング・コブラ)の設定)。ソン・ラクヒョンは放映中止を1993年に行われた第14回目のアメリカワールドカップのアジア予選という文脈の中で解釈、「ペドロ」が韓国人であることを知る人ぞ知っているがために、MBCはアジア予選で韓国が日本に負けた日に第18話を放映するわけにはいかなかっただろうと解釈している(韓国では「ドーハの奇跡」、日本では「ドーハの悲劇」と言われている)。

筆者が注目したいことは、放映中止の本当の理由ではなく、ソン・ラクヒョンがMBCの放映打ち切りを批判しながら、『あしたのジョー』を次のような物語として回収していくところにある。ソン・ラクヒョンは「原作上」の金竜飛の描かれ方は「叱責の余地」ありと指摘しながら、「露骨に韓国人を卑下する映画」までも上映されている現在、「安っぽいボクサーが追い求める富」「名誉」「女性」、そして勝負の「快感」のためのボクシングではなく、「ボクシング」そのものに「まっ白に……燃えつきた」矢吹丈の生き方こそ、「本物」の人生であると評価する。しかしながら、「富」「名誉」「女性」、そして勝負の「快感」のためのボクシングは、はたして「安っぽいボクサー」であることの証明たりうるだろうか。そうではあるまい。注意すべきは、「燃えつきる」矢吹丈を「本物」のボクサーとして囲い込む視線がそれ以外を不謹慎なボクサーとして線引きし排除していくことであろう。しかし、「燃えつきた」のは矢吹丈一人ではなく、もう一人いたのである。「氷が……青白く燃えあがった」(第16巻、90頁)、これは一心不乱に矢吹丈を攻撃する金竜飛の姿に対する韓国コーチの言葉である。すなわち、どちらも「燃えあがった」=「燃えつきた」のである。しかし、金竜飛は矢吹丈に負けてしまう。

矢吹丈と金竜飛の対戦を考える時、注目すべきは矢吹丈の体重の変化である。それまで一回も減量苦に悩まされたことのない矢吹丈は、金竜飛との対戦を前にして急に減量を迫られる。気になるのは、この突拍子もない体重の変化が、何故、ほかの選手ではなく金竜

3) ソン・ラクヒョン 『エニスクール・第2巻』1997年10月、ソウル文化社、31～32頁、拙訳は筆者)

飛の時なのかである。試合直前、偶然、レストランで出会った二人。金竜飛は矢吹丈が減量に苦しみながら、「わたしは飢えた若者でございます」という「悲愴気取り」の顔に「なんとも鼻もちならなく」なって、次のような個人史を披露しはじめる。

金竜飛 わたしがこのレストランにきてなにを注文したと思う？ そう、このレモンティーだけさ。ほかにもうなにもほしいとは思わない。けさ、早くにビスケットと半じゅくたまご、それにくだものをすこし食べた……それっきりだ。はっきりいえば、これ以上、胃が受けつけないのだよ。

矢吹丈 胃が受けつけない……？！

金竜飛 つまり、ちいさいころから飢えに飢えきった長い年月が、わたしの胃ぶくろをちいさいままにちぢめてしまったのだ。かなしいかな、許容量がきめられてしまったのだ。

矢吹丈 なぜ……。

金竜飛 戦争だよ⁴⁾。

金竜飛の身体性は「朝鮮戦争」によってちいさいままにちぢまってしまった「胃ぶくろ」をもつ主体として設定されている。それだけではなく、戦争ゆえに母親を亡くし父親までも誤って殺してしまった過去をも背負っている。そして、矢吹丈の身体性も金竜飛と同じく孤児であり、ドヤ街育ちのハングリーボクサーなのである。しかし、矢吹丈は金竜飛との対戦を前にして急に「満腹ボクサー」へと変身してしまう。そして、金竜飛の過去に「こっぴどく劣等感をうえつけられ」た矢吹丈は、「そうさ……あいつにとっちゃこうやってスポンジのはいったグローブで保護された程度のなぐりあい……じつにのどかな平和な世界なんだ……いずれにせよ、少年院あたりでつまらぬ意地や体面のためにやってきたケンカボクシングのそんなおよぶ境地じゃねえ……およぶ境地じゃねえ……勝てっこねえ」(第16巻 40～41頁)と「劣等感」を抱き戦意を失ってしまうことになる。

注目すべきは、実は矢吹丈は金竜飛以外にもう一人の韓国人ボクサーと戦っている。韓国バンタム級チャンピオン・金敏腕である。ところが、金敏腕との対戦はあっさり「これまた四ラウンド一分三十六秒でノックアウト！」(第14巻 143頁)とだけ描かれている。たったの3頁である。言うまでもなく、3頁の紙幅の中では金敏腕の個人史は何一つ語られていない。しかし、同じく韓国人である金竜飛の個人史が語られる瞬間、矢吹丈は急に太っていくのである。そうすると矢吹丈の体重の変化は、単なる偶然ではなく、金竜飛の個人史と密接に関係した設定と考えるべきだろう。つまり、矢吹丈の「満腹ボクサー」という身体は、金竜飛の「朝鮮戦争」という個人史を経由して作られた設定として捉えるべきである。

そして、興味深いのはこうした「朝鮮戦争」をめぐる二人の心理戦は、単なる漫画の出来事ではなく、同時代における日韓関係を比喩的にうまく描いているということである。注の

4) 『あしたのジョー』(1993年9月、講談社コミックス、第15巻、196～197頁、以下本文引用も同じ)

関連年譜を見れば分かる通り、『あしたのジョー』の連載開始と同時に、韓国では北朝鮮武装ゲリラによる青瓦台襲撃未遂事件（金新朝事件）とアメリカの情報収集船が北朝鮮に拿捕されるプエブロ号事件が立て続けに起こり、「韓国第二のベトナムに変貌するか」（「自由世界」1968年3月）、「再び38度線は火を吹くか」（「文芸春秋」1968年4月）、「第二次朝鮮戦争の危機」（「潮」1968年6月）、「危機深まる朝鮮半島と日本」（「現代の眼」1968年8月）、「危機をはらむ三十八度線」（「リーダーズ・ダイジェスト」1968年7月）、「特集・体験のなかの朝鮮戦争」（「思想の科学」1969年6月）など、日本では朝鮮半島での第2次朝鮮戦争危機説がマスコミを賑わせていた時期でもあった。そして、朝鮮半島の第2次朝鮮戦争危機説が日本人にどのように認識されたかは次の資料から端的に分かることができる。

敗戦で息の根をとめられていた兵器産業にとって、それは干天の慈雨であったし、「死の商人といわれながらも、経済的には、企業が生残る手段としてやむを得なかった」（山田稔ダイキン工業副社長）。（中略）日本の経済は日清戦争以来、太平洋戦争を除いて戦いのたびに太った。朝鮮特需でも戦争を好感する体質を示した。いまでも、ベトナムの平和進展が伝わると、株価がニューヨークは上がるのに、東京では下がる。安藤良雄東大教授（日本経済史）は「戦争によって経済が繁栄し、国民生活が目みえてよくなるというパターンが、朝鮮戦争では、平和憲法下で再現した。平和主義に徹した風みえたところで、隣国の戦争でどん底から救い上げられた事実は、日本人の平和憲論に微妙に影響しているはず」と指摘する⁵⁾。

「朝鮮戦争」という言葉は日本人の「死の商人」という内面を前景化させる言葉として機能し、ねじれた「日本人の平和憲論」を浮上させている。つまり、「朝鮮戦争」をめぐる同時代の言説と漫画を読み合わせてみると、矢吹丈は「朝鮮戦争」ゆえにちいさいままにちぢまってしまった金竜飛の「胃ぶくろ」を前にして、「死の商人」を徹しながら「隣国の戦争でどん底から救い上げられ」高度成長してしまった日本人としての道義的責任を突きつけられているのである。矢吹丈の「満腹ボクサー」という設定はその現われであり、矢吹丈の「勝てっこねえ」という「劣等感」は単なる金竜飛の過去の大きさからより、そもそも対等な立場で戦ってはいけないという道義的責任からくる罪悪感と解釈すべきである⁶⁾。

5) 「日本とアメリカ朝鮮特需がバネに不況乗り越え高度成長への道」（「朝日新聞」1971年3月28日）

6) MBCのTVアニメ『挑戦者ハリケーン』では、体重の変化を手がかりに「死の商人」としての戦後日本のアイデンティティを考えることはできない。放映直前の第1回目新聞予告によれば、矢吹丈は「戦争孤児」としても造形されているからだ。「戦争孤児である天才ボクサー・ジョーは、試合で相手選手を殺してしまった罪悪感から、こっそりボクシング界から姿をくらます。そして一年後、この世を去ったボクサーの追悼イベントにボロボロ姿で現われたジョーは、リングに復帰することを決心する」（「天才ボクサー・ジョーの復帰決心」 「東亜日報」1993年5月28日）と紹介されているように、矢吹丈は韓国人としてだけでなく、「戦争孤児」へと設定が変わっている。「戦

3. 「戦うコンピューター」・金竜飛の二重性

金竜飛の身体性を考える時、もう一つ興味深いのは金竜飛が精密機械＝「戦うコンピューター」として描かれていることである。

ワンツウ！ワンツウスリー！ワンツー！ワンツースリーッ。せ…正確だなおい…ミスなんかまるでないじゃん。精密な機械そのものといった感じだぜ。だいいち、あの金さん、つかれるってことを知らないのかい。時間がたつにつれてますます動きがすどくなっていくようじゃないか7)。

へへへ見ろよ、あの目つきを…おれがどのていどダメージをうけたかを計算してござるぜ。チンチンチンガチャガチャガチャ……ってな。(中略)へっ…第1ラウンドは疲労度5、ダメージ3…ってか。まあせいぜい観察してくれや8)。

疲れることなく、正確に相手にパンチを当てる「コンピューター」としての金竜飛という身体。勿論、このような設定自体は単純に漫画的なフィクションだと考えることもできるものの、同時代の言説を参照すれば少し違う解釈も可能となる。以下の「コンピューター」をめぐる新聞記事(朝日新聞)、「飼いならせコンピューター」(1969年1月1日)、「創造力を持つ機械」(1969年9月15日)、「コン婚夫婦」(1969年9月17日)、「TM教室一出番なくなる先生」(1969年9月20日)、「悩み事相談に解答」(1969年9月23日)、「コンピューター芸術修業」(1970年1月1日)、「「文子」が「フンコ」」(1971年2月7日)、「コンピューター男の壮大な失敗」(1971年7月4日)、「機械が奪った誇り」(1971年7月4日)、「デンサンキ シンヨウ バカリ デキナイ—専門家が情報公害を告発」(1971年7月12日)などからも分かるように、コンピューターは1960年代後半から日本に本格的に入ってきている。そして、日本上陸初期はコンピューターが人間より知能が高いという認識が圧倒的に多く、結婚や悩み相談ましてやコンピューターに絵や小説まで書かせたりする。つまり、初期の段階ではコンピューター優位論＝脅威論が圧倒的だった。しかし、完璧だと思われていたコンピューターの「ミス」が多発するにつれ、議論は段々コンピューター下位論＝公害論へと展開することになる。

興味深いのは、優位論から下位論への議論の展開とパラレルに、「コンピューター」と

争」とは「朝鮮戦争」に他ならず、そうすると矢吹丈は原作上の金竜飛の個人史をも取り込んだ主体となっている。当然ながら、「朝鮮戦争」を個人史ともつ矢吹丈からは、同時代の第2の朝鮮戦争危機説を契機に浮上する「死の商人」をめぐる日韓の問題を考えることはできなくなる。

7) 『あしたのジョー』 (第15巻、99～100頁)

8) 『あしたのジョー』 (第16巻、15～16頁)

しての金竜飛が矢吹丈に逆転負けしてしまうということだ。そして、何よりも不思議なのはこのように同時代に話題になっていたコンピューターという最先端の機械が、何故、韓国人ボクサーと接続しているかである。同時代のコンピューターは、言うまでもなく韓国ではなくアメリカから輸入されたものである。長引くベトナム戦争などで不況に見舞われていたアメリカは、その打開策として日本市場を狙いに定め、コンピューターの輸出振興策を強力に押し進め出した⁹⁾。つまり、矢吹丈が「戦うコンピューター」・金竜飛に感じる「劣等感」は、同時代の日本が「原子力や大型電子計算機、宇宙開発など“先端産業”と呼ばれる分野」などの貿易面において、アメリカと互角の競争ができないという気持ちからくるコンプレックスとも解釈できる¹⁰⁾。ちなみに、金竜飛を「戦うコンピューター」に作り上げたコーチの玄曹達大佐は、現役の韓国空軍の軍人として設定されている¹¹⁾。当然、韓国軍は在韓米軍の指揮下にあり、朝鮮戦争の時に玄曹達大佐に拾われた金竜飛という設定は、朝鮮戦争の時にアメリカに救われた韓国(=金竜飛)というアレゴリーとしても解釈できる。つまり、矢吹丈と金竜飛の対戦は、日韓・日米の二重性を帯びているのである。それならば問われるべきは、最初は圧倒的な強さで試合の主導権を握っていた「コンピューター」としての金竜飛が、どういう「ミス」(=論理)ゆえに矢吹丈に負けてしまうかを明らかにすることであろう。

4. 「父親殺し」の対戦

「朝鮮戦争」を個人史と持つ金竜飛を前に、矢吹丈は一旦「勝つこねえ」と戦意を失う。しかし、カウント終了寸前、矢吹丈は奇跡的に精神的ダメージを回復し立ち直ることになる。この回復を可能にしたのは、かつて対戦相手だった力石徹の死をある独特な方法で想起したからである。元々、フェザー級だった力石徹は、矢吹丈の中に「永遠のライバル」を見出し過酷な減量を自らに課した結果、試合には勝ったもののリングの上で息を引き取った選手である。矢吹丈は、その力石徹の死を次のような方法で想起する¹²⁾。

9) 「強まる米の攻勢 弱い国際競争力—コンピューター白書」(「朝日新聞」1971年7月30日)

10) 山本進「嵐のなかの日米経済関係—「経済大国」に試練の季節—」(「世界」1970年12月、85頁)

11) 日本で放映されたアニメ『あしたのジョー2』(1980年10月13日～1981年8月31日、日本テレビ)では、金竜飛と玄曹達コーチは二人ともベトナム戦争に参戦した「猛虎部隊」の特攻隊という設定になっている。

12) 試合の「負け」から精神的回復をはたし勝利へと繋げる物語の運びは、なにも『あしたのジョー』に限ったものではない。桜井哲夫は1960年代の少年野球漫画の構造を分析していて、少年野球では悪戦苦闘して作り出した「魔球」は相手選手に打たれた瞬間、「負け」となる。負けたら第2の「魔球」、そしてまた負けたら第3の「魔球」をあみだすべく特訓が延々と反復される。桜井哲夫はこの反復を強いる「武士のエートス」(勤勉力行、克己の精神、禁欲倫理)こそが「魔球」の本質だと述べる。そして、こうした「武士のエートス」が神聖化されればされるほど、実際の野球世界で生き残るための必須条件でもあるはずの「すれっからし、金への意

そうだ……力石も飢えていたんだ……力石も飢えていたんだよ……おれはこの金竜飛が……飢えのために父親を石でたたき殺したという話をレストランで聞かされて以来……それ以来……そ……そのくぐってきた地獄のでかさにあぜんとし……こっぴどく劣等感をうえつけられちゃった……（中略）しかしなにか……なにかひとつこの金には屈服しきれないものがあった……そ……そのなにか……とはあの死んだ力石は自分の意志で「のまなかった」「食わなかった」……！飲まず食わず—それゆえの死とひきかえに……力石徹は男の戦いをまっとうし、おれとのきみような友情に殉じたっ！なんのことはねえ……死の寸前の飢えがなにも絶対じゃねえ¹³⁾。

矢吹丈は、金竜飛は「朝鮮戦争」という環境のせいで「胃ぶくろ」が小さいままにちぢまってしまったけど、力石徹は大きくなった「胃ぶくろ」を「自分の意志」で小さくした、その「意志」こそが金竜飛の「飢え」より偉大だという論理をもって力石徹を想起している。しかし、力石徹が矢吹丈の中に宿命のライバル意識を感じ、階級の違う矢吹丈との対戦をわざわざ引き受けたのは、環境に甘えることより「自分の意志」の優位を確認するためではなかったはずである。

もう敵意はねえ、憎悪もねえ。つまりけんかじゃないってことさ。こんどはボクシングをやる……じっくりとな！あるべきは高級で非情でみかき抜かれた技術のみだ。芸術なんだ拳闘は！（中略）一秒も早く、正確に、理づめに、相手をたおす、精巧なファイティングマシン。強力な力をひそめた、戦う機械になりきる。そいつがボクシングさ！¹⁴⁾

橋本努も指摘しているように矢吹丈の両手ぶらり戦法、すなわち「俺は、君と対等な立場で戦うことのできる人間じゃないんだ。あらゆる辛酸をなめてきた人間なんだ。そういう俺を、君は殴ることができるのか。殴りたければ殴ればいい。しかし俺はお前を許さない。負けてもお前を恨みつつける。俺は人間を恨んでいるのだ。その恨みをお前にぶつける」という「道徳的なメッセージ」を突きつける矢吹丈の戦法は、力石徹には通用しないのである。その理由とは上記の引用文からも分かるように、力石徹は「恨みや憎悪といった感情でもって闘争心を燃やすのではなく、感情を抜きにして、マシンになって最高の闘争に挑む。力石徹はそういう強靱な精神をきたえている」からだ¹⁵⁾。つまり、矢吹丈の想起する力

地、汚いまでの執心、ずるさ、がめつき」という側面は下位レベルに格下げされ不謹慎なものとして抑圧されてしまうと指摘する。つまり、「魔球」とは「巧みな搾取のイデオロギー」＝「政治的魔球」でもあり、『あしたのジョー』において問われるべきは、共に「燃えあがった」金竜飛を矢吹丈がいかなる「巧みな搾取のイデオロギー」をもって逆転KO勝ちするかであろう。（『思想としての60年代』1988年6月、講談社、57～59頁）

13) 『あしたのジョー』（第16巻、103～107頁）

14) 『あしたのジョー』（第3巻、202頁）

15) 橋本努「全共闘と『あしたのジョー』」「革命待望！」（2009年4月、ポプラ社、48頁）

石徹の「意志」とは、自分のコンプレックスや相手の個人史に振り回されるのではなく、対等な関係で互角の勝負をするという意味である。だから、矢吹丈が力石徹を想起することによって金竜飛と対等な試合を展開するのであれば理解できるものの、力石徹の「意志」をもって金竜飛は「劣っている」人間と決めつけるのは飛躍した解釈だと言わざるを得ないだろう。

実は二人の勝負を決定づけた最大の理由は、金竜飛が力石徹より「劣っている」からではなく、金竜飛が矢吹丈の顔面から飛び散る「血」を見たからである。矢吹丈は力石徹を想起することによって精神的ダメージを回復し勢いよく反撃に出るものの、金竜飛は打たれながらもそれなりにパンチを交していた。しかし、「血」を見た瞬間、「うわあああお……っ」と発作を起こし、矢吹丈はその隙間を狙って勝利を勝ち取ったのであり、金竜飛を狂わせた「血」とは朝鮮戦争の時、飢えのために「自分の父親を石でたたき殺した」というトラウマ的記憶と繋がっている。そうすると矢吹丈が金竜飛に「勝てっこねえ」と抱く「劣等感」は、戦争ゆえに小さいままにちちまってしまった「胃ぶくろ」だけではなく、少し違う側面からの考察が必要となる。

そもそも「劣等感」という気持ちだけを説明するのであれば、戦争ゆえにちいさいままにちちまってしまった「胃ぶくろ」の設定だけでも十分こと足りたはずである。それにも関わらず、わざわざ父親を殺してしまった記憶が挿入されている。ここで大事なのは、金竜飛は普通の人殺しではなく、「父親殺し」であるということだ。そして、「父親殺し」というエピソードが意味をもつのは、金竜飛本人ではなく、それを聞かされる矢吹丈側にこそある。「父親殺し」というエピソードはそれを発見すべく機能する現在性と結びついた問題であり、それを発見する条件や環境の下でしか発見されない。それでは問われるべきは、金竜飛の「父親殺し」という記憶に敏感に反応してしまう、反応せざるを得ない矢吹丈の現在性に他ならないだろう。

教育学者の藤田利久は、矢吹丈と力石徹の関係について次のように説明している。

力石とジョーの少年院内での出会いは、象徴的であった。配達係の力石が自転車（特権を意味する）にまたがり、丹下氏からのはがき「あしたのために」をジョーに届けにきたときのこと。「わざわざ持ってきてやったのに、礼くらいいったらどうだ」といった力石に対し、誰に対しても攻撃的に出ていたジョーが「ありがとう」と畏敬の念を感じたともとれるくらいに素直に返事をしたのである。ジョーは無意識のうちにも力石の権威を認めた。力石はその権威をさらに決定づけたかのように、はがき(母親の優しさを意味する)を拾おうとするジョーの手を自転車でひいて立ち去った。このことは、父親と息子との世代間の争いを象徴するものであり、親世代の強さを表すとともに、子の男性社会への移行を促すもの、としてとらえることができるのだ¹⁶⁾。

16) 藤田利久「見果てぬ両親を求めて」(『「あしたのジョー」心理学概論』1995年1月、中央文庫、161～163頁)

上記の自転車事件だけでなく、矢吹丈が暴走する豚に乗って脱走を試みた際も、「脱走はあきらめるんだな」という力石徹の一声で簡単に阻止される場面がある。それらが象徴するように、力石徹の存在は圧倒的な力の差をもって社会の規範やルールを教える「父親」だった。しかし、矢吹丈はその父親たる力石徹をリングの上で殺してしまう。勿論、直接的な死の原因は減量苦によるものではあるものの、試合自体に最大の原因があることは間違いなく、だからこそ矢吹丈は力石徹を死に至らしめたショックからボクシング界を離れ抜け殻のように放浪することになる。そして、辛うじてリングに復帰した後も力石徹を殺した罪悪感のため、対戦選手の顔面が打てなくなるトラウマに陥ってしまうのである。

しかし、当然ながら、二人の「父親殺し」同士の対戦を「劣等感」という言葉で回収説明する根拠はどこにもない。それにもかかわらず、矢吹丈が「劣等感」を抱くのは、「父親殺し」自体に原因があるのではなく、トラウマ的記憶を受け止める金竜飛の姿勢が自分とは全く違うからである。金竜飛は自分の父親を殺してしまった過去を次のように語る。

わたしはいくら知らなかったとはいえ、ほんのわずかなひとにぎりの食糧のために、自分の父親を石でたたき殺した男さ。父親の血で手をまっかによごした男さ。……ふふふ。それからというものは一度も満腹したことがないから胃ぶくろはちいさくちいさくちぢまるいっぽう—。(中略)ボクシングの世界は弱肉強食だって？ノーノーままごとだよ。ままごとなればこそわたしはいくらでも冷静におちついて……しかも徹底して残酷につめたく最後までリングをつとめることができる。ボクシングはじつにのどかな平和な世界なんだよ。わたしにとっては……17)。

二人とも同じく「父親殺し」であるにもかかわらず、矢吹丈が「劣等感」を抱かざるを得ない理由は、金竜飛は自分とは違って父親を殺してしまった過去を語りながら「ふふふ」と笑えるからだ。矢吹丈は「父親」としての力石徹を殺してしまった罪悪感に取りつかれ過去を引きずっている反面、金竜飛は「父親殺し」という過去をうまく克服している。だから、自分の父親を石でたたき殺した金竜飛のもらす「ふふふ」に「こっぴどく劣等感をうえつけられ」、「およぶ境地じゃねえ」と戦意を失ったのである。

矢吹丈の抱くこうした「劣等感」を同時代の問題として考えると、東大安田講堂事件をはじめ学園闘争を展開していた全共闘世代が抱えていた問題へとリンクする。漫画キャラクターである力石徹の葬儀を行ったことで話題となった劇団天井桟敷の団長・寺山修司は、力石徹の死から次のような同時代の「時代感情」を読み取っている。

あしたのジョーでは矢吹と力石の対決のなかに、さまざまな比喩を投げこみ、四角いジャングルの中に69年から70年へかけての闘争的な時代感情を反映している。(中略)力石はスーパーマンでも同時代の英雄でもない。要するにスラムのゲリラ矢吹丈の描いた仮想

17) 『あしたのジョー』(第15巻、211~212頁)

敵、幻想の体制権力だった。(中略)力石は死んだのではなく、見失われたものであり、それは70年の時代感情のにくにくいまでの的確な反映というほかないだろう¹⁸⁾。

寺山修司は力石徹の死を全共闘世代の学園闘争という文脈から捉え、二人の関係を「スラムのゲリラ」対「幻想の体制権力」として対峙してみせる。全共闘世代とは1940年代後半から1950年代初頭に生まれた、いわゆる団塊世代に属する。全共闘の学園闘争の特徴は、自治会を基盤とせず、一般の学生が自然発生的に結集した闘争であった点、まさしく「ゲリラ」だった。そして、「幻想の体制権力」とは戦後民主主義を作り上げた「ゲリラ」の親世代を指すものに他ならなく、そういう意味で力石徹の死は全共闘世代による「父親殺し」とも言えるのである¹⁹⁾。

柴田勝二は全共闘世代の学園闘争の特徴について、「参加した学生たちの目指したものが、大学における教育・研究条件の相対的な改善」などの具体的な成果ではなく、「経済大国」の実現と推進のために、学校でも社会でも「人と競り合うこと」をより厳しく強制してきた日本の戦後社会に「否定の声」を上げることだったと説明している²⁰⁾。しかし、全共闘世代の「否定の声」は、実は「両義的」でもあったと柴田勝二は指摘する。彼らは「戦後社会の方向性に疑念を向けようとする一方」、「その経済成長のもたらした物質的な恩恵のなかに生きてきた」のであり、だからこそ、学園闘争に関わった学生たちの中には、卒業後「有能なサラリーマン」に変身するケースが多かったと言う。当然ながら、全共闘世代のこうした「両義的」側面に力点を置けば置くほど、親世代の「物質的な恩恵」に甘んじていた全共闘世代の「劣等感」はますます前景化することになるだろう。

同じく「父親殺し」にもかかわらず、矢吹丈が金竜飛に「劣等感」を抱かざるを得なかった理由は、全共闘世代の両義性と関係する。矢吹丈は「父親殺し」を「ふふふ」と笑いながら語れる金竜飛を前にして、自分の「父親殺し」に潜んでいる両義性に気づかされたのである。それは一旦「否定」したはずの力石徹(=父親)を肯定の文脈でもう一度召還することであり、矢吹丈の「否定」の論理が結局のところ、「父親」としての力石徹の思考形式(=「物質的な恩恵」)に甘んじていることを物語る。全共闘世代としての矢吹丈は、「体制権力」側の人間でもある力石徹を肯定の文脈で捉え直すことによって、親

18) 寺山修司「だれが力石を殺したか」(『日本読書新聞』1970年2月16日)

19) 橋本努は力石徹とは「基本的に、優等生的な人なんです。頭がよくて頭脳プレイができる。また、その力石というのは、白木葉子さんと将来的には結婚が約束されていて、勝てばある種の勝ち組の生活が待っている。そういうエリート・ボクサーです」と「勝ち組」すなわち「体制権力」側(「経済大国」を作り上げた親世代)の人間であると説明している。だから、ある種のエリートでもある全共闘の学生たちは、力石徹に自分たちのアイデンティティを重ね合わせた部分があると言う。但し、力石徹は「自分と互角の人間がいるとすれば、絶対に勝負しなければならぬ」という「騎士精神」を持っている人間である点、全共闘世代が目指す生き方ではないと指摘する。(『全共闘と「あしたのジョー」』『革命待望!』2009年4月、ポプラ社、48~49頁)

20) 柴田勝二「全共闘世代の表現」(『時代別日本文学史事典 現代編』1997年5月、東京堂出版、429~430頁)

世代に抱えていた「劣等感」と朝鮮戦争を踏み台にして高度経済成長(「胃ぶくろ」の膨張)を成し遂げた「死の商人」というトラウマ的記憶を回避することができたのである²¹⁾。

5. 改訂版「大東亜共栄圏」

そして、矢吹丈の「劣等感」克服＝回避を同時代の日韓政治・経済問題として考えてみると、日本の安保条約とかかわってくる問題でもあった。

(二)随時協議においても事前協議においても日本政府は“イエス”もしくは“ノー”をいえるが、アメリカ政府の力に押されて“イエス”をいう可能性が大きい。その場合は日本国民の望まぬ戦争に共同責任で巻き込まれる。(三)随時協議においても事前協議においても、日本政府が“ノー”といったとしても、それが法律的にアメリカ政府を拘束するわけではない。運用はもっぱら両国政府間の信頼関係にかかっているにすぎない。(四)日本政府はアメリカ政府との協議の場合、国会にはかかる必要をみとめておらず、協議の結果が国会の抗議決議などによって拘束されるとも考えていない²²⁾。

朝鮮半島に第2の朝鮮戦争が起きれば、日本の米軍基地から米軍機が出動することになるのだが、問題は日米間には「事前協議」という安保条約が結ばれていて、米軍基地からの離着陸を日本政府に報告することになっている。しかしながら、「事前協議」という条約には、もしもアメリカ側が報告しなくても日本政府としては「ノー」と言える法的拘束力はなく、結果的に朝鮮半島に戦争が起きれば「日本国民の望まぬ戦争に共同責任」を負わざるを得なくなる。つまり、第2次朝鮮戦争危機説は、アメリカとの非対称的な関係からくる「劣等感」と望まぬ戦争に荷担してしまうという道義的問題を同時に前景化させることになる。韓国とアメリカの二重性をおびている金竜飛を前にして「勝てっこねえ」と戦意を失う矢吹丈は、こうした同時代の日本の無意識を反映しているとも言えるのである。

しかし、同時代の日本はこのような複雑な政治的状況から発生する道義的問題を微妙に経済的問題へとすり替えていくことになる。そして、そのすり替えの契機を用意してくれたのが1969年の「ニクソン・ドクトリン」をはじめとするアメリカのアジア政策の路線転換である。デイヴィッド・ケネディ米財務長官は朝日新聞記者との会見の中で、「国際収支上はもち

21) TVアニメ『あしたのジョー2』(1980年10月13日～1981年8月31日、日本テレビ、全47話)では、金竜飛が自分の父親を石でたたき殺す場面とオーバーラップされる形で親世代にあたる丹下段平コーチを矢吹丈が石でたたき殺そうとする場面が描かれている。しかし、矢吹丈は金竜飛とは違って、丹下段平コーチを殺せずパニックに陥り悲鳴をあげている。

22) 藤島宇内「朝鮮危機と安保条約の構造」(『世界』1969年6月、231頁)

ろん日本経済はきわめて好調で、いまや国際的責任をとり得る立場にきた。日本は他国から助けを借りるような弱小国、貧乏国ではない。生産力のある実力国だ。米国は世界防衛の重荷を背負っている。従って、日本が国際的責任の面で踏出し、米国が引揚げた地域の援助や米国の負担の一部肩代わりなどを行うよう要請したい」（「朝日新聞」1969年4月25日）と語っているように、アメリカはオーバー・コミットメントによるベトナム戦争の重苦しい経験からアジアにおける米国の役割を日本に一部「肩代わり」してもらうことになる。

こうしたアメリカの政策転換は、「工業化」のためとして行われた輸入激増にともなう多額の貿易収支赤字(1969年度には12億ドル)を、外資導入、ベトナム特需、在韓米軍特需の貿易収支の黒字でもって補填していた韓国としては大きなダメージをこうむることになる²³⁾。結果的に、韓国は特需減少の打開策として日本からの外資導入政策を促進することになる。中川信夫は日本資本の対韓直接投資のための日韓定期閣僚会議について次のようにまとめている。

この会議（第5回日韓定期閣僚会議）で日本側は、①ソウルの地下鉄建設計画への八〇〇〇万ドルの借款供与に同意し、②特殊鋼、鋳物鉄、重機械、伸銅等の重工業四大プロジェクトについては、プロジェクトごとに計画の妥当性を検討し、借款を供与することに同意、③日韓海運協定締結との関連での船舶借款五〇〇〇万ドル供与に同意したほか、来年から開始される韓国の第三次経済開発五カ年計画に全面的に強力することを約した。（中略）今回の日韓閣僚会議を通じて日本側が、①政府ペースの対韓「経済協力」を必要とされるだけ、無制限におこなうこと、②投資環境整備作業の総仕上げと関連して、民間資本の対韓直接投資を本格化させること、③重工業建設にまでおよぶ、韓国の経済計画や政策の決定・実施過程への介入を増大させること、をあきらかにした事実が浮彫されてくることになる²⁴⁾。

1965年の日韓国交正常化以降の日韓経済関係は、主に「商業借款」主軸の関係、つまり比較的結合のゆるやかな「協力」関係だった。しかし、「ニクソン・ドクトリン」以降は日本資本の「直接投資」主軸へと変わり、きわめて結合度の強い「一体化」段階に移っていくことになる。ここで注意すべきは、中川信夫も改訂版「大東亜共栄圏」のモデル・ケースとしての「日韓経済圏」と指摘している通り、日本資本の「直接投資」の本格化は、平等な関係を前提とするものではなく、日本が韓国の経済計画決定過程に直接介入が強化されることを意味する²⁵⁾。

23) 中川信夫によれば、「ニクソン・ドクトリン」実施により韓国の「ベトナム特需は、1969年の1億4000万ドルから70年の1億1500万ドル、71年には8000万ドル（予想）へと、在韓米軍特需は、69年の1億5570万ドルから70年の1億3700万ドル、71年の1億800万ドル（予想）」へと減少しはじめていることを指摘している。（「日韓一体化の政治経済学」『世界』1971年5月、130頁）

24) 中川信夫「「日韓経済圏」形成の政治的帰結」（『世界』1971年11月、162～163頁）

『あしたのジョー』の連載と時期を同じくして、日韓の経済関係は「商業借款」から資本の「直接投資」へとパラダイムが変わっていつている。日本の資本が韓国経済・政治をコントロールしはじめてるように、矢吹丈は力石徹を想起することによって、金竜飛に覚える「劣等感」をコントロールできるようになる。しかし、前述の通り、「劣等感」を克服するために想起される力石徹とは、「体制権力」側の人間、つまり資本主義の論理のもと「経済大国」の実現と推進のために「人と競り合うこと」を強制する側の人間であった。だからこそ、全共闘世代としての矢吹丈はそういう支配原理に絡めとられないように力石徹と戦ったのである。しかし、金竜飛との対戦において一度「否定」したはずの力石徹を想起することは、資本主義の論理に依拠せざるを得ない側面があることを意味する。自分のコンプレックスや相手の個人史に振り回されることなく対等な関係で勝負することを目指す力石徹の「意志」は、日本国内の問題からすれば「騎士精神」(橋本努)と言えども、「資本」をめぐる日韓の経済関係からすれば、両国の非対称的な関係を考慮に入れないまったく異なる作用の次元を含む「意志」とも言えるだろう。

6. まとめ

乗松優は1952年から始まった「東洋選手権」の役割について、「それはまず、国際競技を日本とアジアの友好関係として演出することであった。というのも、戦禍を被った国々では通商再開を急ぐ日本の姿勢に不信の声が上がっており、政府は国益を追い求める他に、国際親善という大義名分を果たさねばならなかったためである。ボクシングは、そうした国益追求と信頼回復のバランスを取ることで、日本社会において存在感を示そうとした」と書いているように、東洋選手権とはかつて大東亜共栄圏下にあった国々との政治・経済的摩擦を和らげつつ、「東洋一」になることで日米関係から生まれる「コンプレックス」＝「劣等感」を代償的に解消する役割を果たしてきたのである²⁵⁾。しかし、乗松優は、東洋選手権の役割は1960年後半に決定的な「転換」を迎えると指摘する。それは高度経済成長を成し遂げた日本が、「最先端の科学を有する国家」＝「肯定的なアイデンティティ」をもつ国として自国を自認しはじめた時、ファンの関心も「東洋一」から「世界」へと

25) 山本進は、日本資本の海外進出はアジア諸国にとって期待ばかりではなく、「脅威と不安の目」でも見られると指摘しながら、国際商業会議所タイ国内委員会委員長のL ラムサムの話を用いている。「タイの工業化を進めるため日本企業はまだ来てほしい。が問題は進出の仕方だ。例えば、五〇対五〇の出資比率で合弁会社を設立する。とすぐ日本側は大幅な増資をいってくる。タイの企業はカネがないから払込めない。日本が肩代りする。こんな繰返しのとどろきがついてみると日本側に八〇%も九〇%も資本をにぎられていた。われわれからすれば詐欺だよ。相互の利益を考えてくれなきゃ」(「日本のアジア経済外交と日米関係」 「世界」1969年8月、49頁)

26) 乗松優「東洋選手権と大東亜の夢」(「西日本新聞」2008年4月21日～4月29日、不連続連載、全5回)

スライドしていったということである。

同時代の「東洋」から「世界」への移行は、東洋バンタム級チャンピオンである金竜飛を倒し、世界チャンピオンの座を賭け勝ち進む矢吹丈の姿とオーバーラップしている。しかし、矢吹丈の逆転劇を同時代に起きていた第2次朝鮮戦争の危機説と日韓の経済接近という文脈から解釈してみると、「朝鮮戦争」という過去をもつ金竜飛に覚える矢吹丈の「劣等感」は、朝鮮戦争による特需で太ってしまった戦後日本の罪悪感と先端産業の技術力だけでなく、日米間の安保条約の面においてもアメリカに劣っているというコンプレックスとして解釈できる。そして、対等な勝負を前提とする力石徹の「意志」を想起することにより「劣等感」を乗り越えていく矢吹丈の逆転KO勝ちは、1969年の「ニクソン・ドクトリン」をはじめとするアメリカのアジア政策の路線転換によって、アジアにおける米国の役割を日本が一部「肩代わり」することになり、安定的な輸出市場と低廉な労働力市場の確保、そして原料資源獲得などに苦心していた同時代の日本が、「日韓経済圏」という名のもとアジアに改訂版「大東亜共栄圏」を形成していく姿と重なる。つまり、二人の対戦は第2次朝鮮戦争の危機と同時に問われる日本の道義的問題を巧みに経済問題へとずらしていく非対称的なパワーゲームだったのである。

【参考文献】

- ファミリーマート「『あしたのジョー』タイアップ企画」(http://www.family.co.jp/company/news_release/s/2008/081128_1.html)
- ソン・ラクヒョン(1997)『エニスクール・第2巻』ソウル文化社、31～32頁
- (1998)『ハリケーンジョー』ソウル文化社
- (1993.5.28)「天才ボクサー・ジョーの復讐決心」『東亜日報』
- (1971.3.28)「日本とアメリカ朝鮮特需がバネに不況乗越え高度成長へ道」『朝日新聞』
- 山本進(1970.12)「嵐のなかの日米経済関係—「経済大国」に試練の季節—」『世界』、85頁
- 桜井哲夫(1988)『思想としての60年代』講談社、57～59頁
- 申化鳳(1968.3)「韓国第二のベトナムに変貌するか」『自由世界』
- 荒井正大(1968.4)「再び38度線は火を吹くか」『文芸春秋』
- 本誌編集部(1968.6)「第二次朝鮮戦争の危機」『潮』
- 岸田純之助・日野啓三他(1968.8)「座談会 危機深まる朝鮮半島と日本」『現代の眼』
- (1968.7)「危機をはらむ三十八度線」『リーダーズ・ダイジェスト』
- (1969.6)「特集 体験のなかの朝鮮戦争」『思想の科学』
- コンピューター関係の新聞記事(朝日新聞)
- (1969.1.1)「飼いならせコンピューター」
- (1969.9.15)「創造力を持つ機械」
- (1969.9.17)「コン婚夫婦」
- (1969.9.20)「TM教室—一番なくなる先生」
- (1969.9.23)「悩み事相談に解答」
- (1970.1.1)「コンピューター芸術修業」
- (1971.2.7)「「文子」が「ファンコ」」
- (1971.7.4)「コンピューター男の壮大な失敗」
- (1971.7.4)「機械が奪った誇り」
- (1971.7.12)「デンサンキ シンヨウ バカリ デキナイ—専門家が情報公害を告発」
- (1971.7.30)「強まる米の攻勢 弱い国際競争力—コンピューター白書」
- 橋本努(2009)「全共闘と「あしたのジョー」」『革命待望!』ポプラ社、48頁
- 藤田利久(1995)「見果てぬ両親を求めて」(『「あしたのジョー」心理学概論』中央文庫、161～163頁)
- 寺山修司(1970.2.16)「だれが力石を殺したか」『日本読書新聞』
- 柴田勝二(1997)「全共闘世代の表現」(『時代別日本文学史事典 現代編』東京堂出版、429～430頁)
- 藤島宇内(1969.6)「朝鮮危機と安保条約の構造」『世界』231頁
- 中川信夫(1971.5)「日韓一体化の政治経済学」『世界』130頁
- 中川信夫(1971.11)「「日韓経済圏」形成の政治的帰結」『世界』162～163頁
- 山本進(1969.8)「日本のアジア経済外交と日米関係」『世界』49頁
- 乗松優(2008.4.21～4.29)「東洋選手権と大東亜の夢」『西日本新聞』

要 旨

「まっ白に燃えつきる」というセリフで有名な『あしたのジョー』は、完全燃焼する矢吹丈の姿に力点が置かれ、日本だけではなく韓国でも消費される漫画である。しかし、そうした消費の枠組みからは、共に「燃えあがった」金竜飛がなぜ負けたかを考えることはできなくなる。矢吹丈の逆転KO勝ちを同時代に起きていた第2次朝鮮戦争の危機説と日韓の経済接近という文脈から解釈してみると、「朝鮮戦争」という過去をもつ金竜飛に覚える矢吹丈の「劣等感」は、朝鮮戦争による特需で太ってしまった戦後日本の罪悪感と先端産業の技術力だけでなく、日米間の安保条約の面においてもアメリカに劣っているというコンプレックスとして解釈できる。そして、対等な勝負を前提とする力石徹の「意志」を想起することにより「劣等感」を乗り越えていく矢吹丈の逆転KO勝ちは、1969年の「ニクソン・ドクトリン」をはじめとするアメリカのアジア政策の路線転換によって、アジアにおける米国の役割を日本が一部「肩代わり」することになり、安定的な輸出市場と低廉な労働力市場の確保、そして原料資源獲得などに苦心していた同時代の日本が、「日韓経済圏」という名のもとアジアに改訂版「大東亜共栄圏」を形成していく姿と重なる。つまり、二人の対戦は第2次朝鮮戦争の危機と同時に問われる日本の道義的問題を巧みに経済問題へとずらしていく非対称的なパワーゲームだったのである。

キーワード： 第2次朝鮮戦争、劣等感、ニクソン・ドクトリン、コンピューター、
安保条約、全共闘世代、改訂版「大東亜共栄圏」

투 고 : 2010. 8. 31
1차 심사 : 2010. 9. 11
2차 심사 : 2010. 9. 25